

## 第1回三重県認知症地域支援体制構築等推進会議概要

平成20年2月21日(木)

三重県栄町庁舎4階研修室

(泉委員 (社)認知症の人と家族の会三重県支部代表)

- ・ 認知症の本人を支えることが基本であるが、本人の後ろにいる家族に対する支援対策も取り入れていただきたい。虐待の問題にしても、虐待する者に対する支援が必要。家族に対する対応が責めになっては、家族の崩壊につながってしまう。

(三吉委員 三重県グループホーム連絡協議会会長)

- ・ グループホームは現在134箇所あるが、認知症の人の数から考えると充実しているとは思えない。入所を希望しても空いていない場合もある。
- ・ 三重県グループホーム連絡協議会として、センター方式を推進している。三重県でセンター方式を取り入れていくのであれば、シートの書き方を教えるのではなく、それを生かす方法を教えてほしい。
- ・ コミュニティをつくるのであれば、サロンのようなものでなく、回想法を取り入れたようなコミュニティはどうか。このようなものが県下にモデルとしてあれば、認知症高齢者だけでなく一般の高齢者も使用できる。

(奥田委員 認知症介護指導者)

- ・ アセスメントの方式にこだわった形でセンター方式の使いばかりの勉強になってしまっていたが、それではいけないということでアセスメントする視点をしっかり持とう、ということをやっている。
- ・ 認知症の人ができないことばかりに目がいってしまい、できることに目が向かない。認知症に特化するとセンター方式は優れていると思うが、シートの全てを使わなくても良いという考えを持っている。
- ・ ケアマネージャーの研修に関して、来年度からセンター方式の項目が入れられると聞いている。

(泉委員)

- ・ 若年性の認知症についてはどうか。

(事務局コメント)

- ・ 若年性の認知症については、実態が把握できていない。この事業については、まず主眼を高齢者においている。

(佐甲委員 三重県立看護大学教授 地域交流研究センター所長 )

- ・ ヘルスプロモーションの視点を大切にしたい。今までは個人へのサービスの提供、ケアを主眼においていたが、ヘルスプロモーションの視点では、サービスだけでなく、個人と地域の力を向上させる、スキルアップとエンパワメントを主眼においている。家族や地域の方がこういう問題に対して乗り越えていくような力をもつ、技を磨くということである。若年性認知症、家族の支援の問題についても、縦割りの行政の事業では難しい面もあるが、ヘルスプロモーションの視点を入れることで、色んな形での支援が可能になる。
- ・ 地域資源マップづくりは、サポーターや専門家だけでなく、住民参加で作成したい。住民が参加することで意識が変わってくる。

(山本委員 (福)三重県社会福祉協議会サービス支援部副部長)

- ・ ネットワークづくりという考え方は以前からあったが、モデル地域中心で実施することにより、形になって表れてきていると感じた。
- ・ 介護における人材確保が危機的な状況にあり、若い人が福祉に目を向けない。
- ・ 事業に地域の住民をどのように巻き込むか、その中で人材確保の視点も並行して持っていただきたいと思う。

(事務局コメント)

- ・ 人材対策は、県としても戦略的にやっていかななくてはならないので、ご協力をお願いしたい。
- ・ 人材不足については、困っているところと困っていないところ、極端に二極化していると思う。

(三吉委員)

- ・ グループホーム職員の離職率は高いわけではない。グループホームの事業主体は、株式会社や有限会社が多い。医療法人や社会福祉法人のグループホームと比べると給料のベースが違う。
- ・ グループホームは収入源が低い。補助もなく、介護保険のみである。

(吉住委員 三重県民生委員・児童委員協議会副会長)

- ・ 民生委員の地域での活動が重要になってきているが、民生委員のなり手

がない。地域に帰ると、お金の管理をするのが大変な認知症の人もいて、民生委員の活動は大変である。

(中林委員 三重県こころの医療センター診療部長)

- ・ 名張市の取組は年齢を意識せず、認知症に限定しないで取り組んでいるのか。
- ・ 団塊の世代は、子どもの交通安全の指導等はかなりやっているが、認知症の問題には興味がないように感じる。参加する人を増やすために、キャラバンを認知症に限定せず養成してはどうか。キャラバン隊として名簿を作り、キャラバン隊であることを示すカードがあれば良いのではないか。

(北森センター長コメント 名張市地域包括支援センター)

- ・ 名張市での取組は認知症高齢者に限定していない。お出かけネットワークづくりについては、子どもの登下校に合わせた時間に自分の散歩をするといった子どもの見守りがあるが、その高齢者版のようなものができればいいと思っている。

(事務局コメント)

- ・ 志摩市のネットワークも、認知症高齢者に限ったものではない。ネットワークを縦割りの行政の中でたくさん作っても意味がない。名張市についても、そのあたりを念頭において進めていくのが望ましいと思う。

(吉住委員)

- ・ 名張市には子どもの見守り、高齢者も一緒に外へ出ていこうという活動を行っている団体が32団体ある。この取組は評価できるものであり、伊賀市にも県にも取り入れていただきたい。

(奥田委員)

- ・ 名張市のコーディネーターについてお伺いしたい。
- ・ 名張市は2009年度以降もサポーターを養成していくのか、またフォローアップの研修等は計画しているのか。

(北森センター長コメント)

- ・ コーディネーターは、まちの保健室職員が兼務する。職種は介護支援専門員と社会福祉士である。既にネットワークづくりや個別ケースの支援も行っている。

- ・ サポーターは20年度までに300人養成することを目標としている。フォローアップ研修も行っていきたい。

(事務局コメント)

- ・ キャラバン・メイトとサポーターを養成するだけに終わらず、フォローアップが大切である。  
20年度は県でもサポーター等を養成するので、市町に引き継いでいってもらいたい。

(中林委員)

- ・ 名張市には古い町並みと新しい町並みがあるが、このことに関して今回の事業について何か配慮をしているか。

(北森センター長コメント)

- ・ サポーター養成講座は市1本で行うが、フォローアップ研修やマップづくりは14地区ごとに行っていく予定。

(井川委員 三重県自治会連合会理事)

- ・ 名張市は福祉に力を入れている。福祉に関して、古い町と新しい町の間の問題はないと認識している。

(大淵委員 三重大学医学部看護学科教授)

- ・ サポーターの質が重要だと感じた。
- ・ 認知症ケアの経験のある人は、身につけた技術を力として地域の中で根付かせたり、他の人に啓蒙する役割もできるのではないか。
- ・ どういう人が、どんな力を発揮できるか、地域の人と自分たちが主体的に活動できる場をどのくらい持つことが課題になる。
- ・ 人々の関心は「認知症にならないように、元気に長寿で生きるか」にある。健康維持、健康増進と認知症予防、また認知症になったときにも安心して過ごせる、というつながりを感じながら地域の力を作っていくのが自然であると思う。